

2026年度

(令和8年度)

学校評価自己評価表

済美	中学校区	校番7	福山市立	済美中	学校
			最終更新日	2026年(令和8年)4月1日	

I 福山市

めざす姿 すべてのこどもたちが、自分自身の成長を実感できる学校教育の実現

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	○課題発見・解決力 ○コミュニケーション力 ○他者とかかわり合う力・心
	各校の課題を踏まえ、中学校区共通のミッション・ビジョンに基づく取組が推進されている。「主体的・対話的で深く確かな学び」の実現に向け、学ぶ力や成長する力を育む授業づくりが継続され、達成感や充実感を味わえる実践が進められている点は評価できる。また、不登校児童生徒への支援や他者との関わりを重視した取組も行われている。今後は、情報発信の充実を図り、保護者・地域と連携した教育活動を一層推進することが求められる。	○自己有用感、自己肯定感が低い児童・生徒において、学ぶ意欲の向上に課題がある。 ○家庭学習が習慣化していない児童生徒が多く。また、基礎が定着していない児童生徒が多い。 ○相手意識を持った行動が不十分な児童・生徒が多く、人間関係のトラブルも多い。 ○長欠・不登校の児童・生徒数が増加傾向にあり、支援が必要である。	中学校区として統一した取組等	①自らの目標に向かって努力し、チャレンジしている。 ②場面や目的に応じた豊かな表現力を身につけている。 ③他者とかかわり合いながら共感的人間関係を築き、共にによりよく生きようとしている。	○「選択・決定」「対話の充実」「振り返り」をキーワードに授業づくりを進める。 ○「主体的、対話的で深い学び」のある授業づくりの研修 ○児童会・生徒会活動の活性化による規範意識と共感的人間関係の育成

III 自 校

学校教育目標	
人間性豊かに他者とかかわり、確かな学力を身に付け、夢を語り、自らの進路を切り拓く生徒の育成	
現 状	
〈児童生徒〉 高い満足度と良好な人間関係、自己管理に課題 生徒たちは総じて学校生活を肯定的に捉えており、対人関係の安心感が学習の基盤となっている。 学校生活への高い満足度と安心感: 全校生徒の91.9%が「学校は楽しい」と回答し、95.8%が「自分を見てくれている先生や仲間がいる」と実感している。 肯定的な集団関係: 93.2%の生徒が「学級内でお互いの考えや意見が認められている」と感じており、心理的安全性の高い状態が維持されている。 学習への意欲: 「授業内容をわかるようになりたい」という意欲は94%と極めて高く、向上心が非常に強い傾向がうかがえる。 家庭での自己管理の課題: 「テレビ・ネット・スマホの使用時間を決めている」は61.6%、「勉強の計画を立てて進める」は74.9%（否定回答が約25%）となっており、家庭での生活・学習習慣の確立に課題がある。 社会参画への意識: 「地域に貢献している」と実感している生徒は70.0%で、学校内の充実度に比べると改善の余地がある。	
〈授業〉 協働的な学びの定着と、発信力・地域連携の課題 「子ども主体の学び」に向けた教員の意欲が、生徒の協働的な学習態度に好影響を与えている。 協働学習の定着: 生徒の91%が「他の生徒と一緒に考えることはおもしろい」と感じ、89%が「周りの人の考えを聞くことで理解が深まった」と回答している。 教員の挑戦的姿勢: 教員の93.8%が「失敗を恐れずに挑戦できている」と回答し、自校の教員の100%が「児童生徒と一緒に考える時間が楽しい」と感じている。 発信・表現力の向上: 協働学習を好む一方で、「自分の考えを周りの人に伝えている」という発信については74%にとどまり、受動的な学びから能動的な発信への移行が求められている。 地域リソースの活用不足: 「地域の人や課題に生徒が直接触れる機会」については、教員の肯定的評価が50%（自校）にとどまっており、社会とつながる授業づくりが今後の焦点である。 授業準備時間の制約: 教員の75%が「ノート・テストの採点・評価」や「校務分掌」を多忙の理由に挙げており、生徒自らが学ぶ授業づくりのための時間を捻出することが組織的な課題となっている。	

育成する力 資質・能力		○課題発見・解決力 (問いを持つ 振り返る 見通す)	○コミュニケーション力 (聴く 伝える まとめる)	○他者とかかわり合う力・心 (思いやり 社会性 貢献)
めざす 子ども像	1 年	活動して気付いた・考えたことなどを振り返り、次の（新たな）目標や課題を見出し、次の活動につなげることができる。	自分の考えを、他者に分かりやすく（例え話の挿入、図表や絵・写真・教材ボードの活用、話し方や声のボリューム・トーンの工夫など）伝え、理解・納得を得ることができる。	多様な他者との多様なかわりを通して、（時には、ぶつかりながら）それぞれの良さやちがいを見出し、受け入れながら、助け合ったり、（競い合い）高め合ったりしようとしている。
	2 年 3 年	活動して気付いた・考えたことやその意味・価値・つながり等を振り返り、見出した次の（新たな）目標や課題を、見通しを立て情報を収集・整理・活用しながら（他者を巻き込んで）解決・達成していくことができる。	自分の考えを他者に分かりやすく伝えながら、質問（反論・同意）・説得・納得等を繰り返し、考えを広げ深めるとともに、まとめたり（合意形成）、新たな発想を生み出したりすることができる。	集団（地域、学校・学年・学級等）活動における自らの役割とその目的・価値を見出し、多様な他者と認め合い・許し合い・補い合いながら、責任を果たしたり、誰かの役に立とうとしてしている。
研究	テーマ	生徒の主体的な学びを進めるファシリテート		
	内容等	○単元指導計画の工夫 ① 単元を貫く問いや課題設定の吟味（教材研究の充実） ② 生徒相互の学び合いの質の向上 ③ 振り返りの充実		
めざす授業の姿		○一人一人が自分で考え、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合っている。 ○学びを振り返り、分かったこと、考えたことを豊かに表現している。		

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立

済美中

学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日）				最終評価（2月末）				
							□指標に係る 取組状況	プロセス 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期（中期）経営 目標の達成状況	プロセス 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	【基礎学力】 データ活用による 学力の定着と向上 (教務部)	★	新規	客観的なデータ分析に基づき、生徒一人ひとりの学習課題を明確化し、ICT・問題データベースの活用により「基礎学力の定着」と「自立した学習習慣」を育成する。	平日の学習時間が30分未満の生徒への具体的な学習支援や声掛けを強化する。英検・漢検の取組を充実させ、学習への意欲向上と、自分の成長を実感できるフィードバックを全学年で行う。授業の振り返りを充実させ、「わかる授業」を実践する。	「自分の学力の伸びを実感している」と回答する生徒の割合：70%以上。 標準学力テストの全国平均比較2回-1回+2回1回。									
1	【多様な学び】 個々の特性に応じた教育内容の充実 (研究部・生指部)		新規	地域社会を「学びの場」として活用し、地域貢献活動を通じて生徒の社会参画意識と自己肯定感を高めるとともに、個々の特性に応じた多様な学習機会を保障する。	ボランティア活動や地域行事への参画を推進し、生徒が地域社会に貢献する喜びを実感できる機会を学期に2回以上設定する。 CSと連携して地域人材を外部講師や学習支援員として招き、教室内外での多様な体験活動（キャリア教育等）を充実させる。	特別支援教育の視点を取り入れた授業改善に関する教員自己評価：80%以上。 地域に貢献していると答える生徒の割合：70%→75%									
1	【不登校対策】 未然防止と社会的自立に向けた支援 (生徒指導部・研究部)		新規	組織的な初動対応体制を確立するとともに、集団作りを推進し、生徒の自己肯定感と学校満足度を向上させる。	「ここタン」を毎日確認し、アラートが出た生徒や肯定感が低下している生徒に対し、24時間以内に面談等の初動対応を行う。不登校支援チームを核とし、スクールカウンセラー等の専門人材によるアセスメントを月1回以上実施して、生徒一人ひとりに適した学習環境等を提案する。生活習慣アンケートにおいて「自尊感情」や「学校の楽しさ」が低い傾向にある学年・学校に対し、地域貢献活動を計画・実施する。	「ここタン」による要注意アラートへの24時間以内の面談・声掛け実施率：100%。 相談室やフリースクール等の利用生徒における「学びの継続」実感率：90%以上									
1	【環境整備】 教職員が生き生きと働ける組織づくり (総務部)		新規	業務の適正化とデジタルツールの活用を推進し、教職員の心身の健康を確保することで、教育活動の質と生徒と向き合う時間を向上させる。	勤務実態データに基づき、学期末等の超過勤務を削減するための「業務量管理・健康確保措置実施計画」を実行する。生成AIを校務（通知表所見の補助、教材作成等）に試験導入し、事務作業を効率化することで、授業準備や生徒対応の時間を確保する。「校内授業づくりメンター」や「相互授業参観」を活用した校内研修を行い、若手からベテランまでが学び合える体制を整える。	教職員の平均時間外勤務時間45-80時間の人数12人を半減させる。 「困ったときに相談できる同僚がいる」と回答する教員の割合：68%→75%以上。									

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。